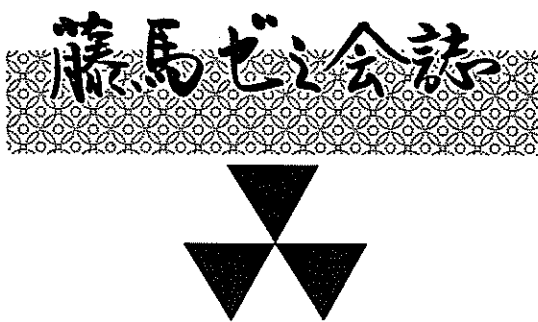




発行
同志社大学法学部
「藤馬会」事務局
☎(07437)4-4816
第4号

前回の藤馬会におきまして、浅学非才な私でありまして、いかかわらず、藤馬会副会長に選任頂き、有難う御座います。もとより未熟な私ではありますが、永田会長をはじめ事務局の皆様のご指導を仰ぎ、藤馬会の発展に全力を尽くす覚悟で御座います。何卒、会員の皆さんのご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

より楽しく面白く

さて、先日発足したばかりかと思っていまして、藤馬会も今回七回目を迎え、「恒例の祭典」となっており、恒例の祭典となりました。これからの藤馬会になるよう頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

藤馬会 副会長 亀井 徹

私は当初この総会に対し、堅苦しいイメージを持っていましたが、最近では楽しく面白くなっております。

恒例の祭典に出席を

折角この様な機会を設けて下さっているのですから、一度も出席されてはいない方は勿論の事、一回目、二回目以降出席されている方にも出席して頂いて、病み付きになって頂けるよう微力ながら会の為にがんばりたいと思います。

しかしながら、社会へ旅立つてから半年。たった半年ではありましたが、色々考えさせられ、苦悶した半年間でした。会社組織に潜む人間関係の難しさや複雑な事務処理。国際事業部に仮配属していた時は、大学の二回生以来遠ざかっていた英語に振り回され、今の立地事務所では様々な法律に出くわし、六法片手に格闘しました。もちろん苦しいことばかりではありませんが、トルコやインドからの研修生との語らいや、立地事務所での阿南の人々との触れ合いなど貴重な体験をすることもできました。

(88年度生)

広げよう 出会いと交流

日々挑戦の半年

石井 景三

(84年度生)

梅花の香る頃になると寒い中にも春へのイメージがポツと膨らみます。確か「庭上一寒梅」という校祖の漢詩がありました。漢文のこの部分しか覚えていないのですが、梅の花とともに、この頃になると母校を感じるのである。それに加えて、ここ七年前よりは「藤馬会総会」が、私にとっては、この季節と同志社を感じさせてくれる季節のようになってしまいました。

先生が会の求心力

話をすると羨望の声すら聞くこともあるのです。同年度の同窓会とは違い、世代を越えた交流をさせていた。現役学生の皆さんには新鮮なキャンパスの風とともに、私達には遠くの時間の彼方となった母校を身近かに感じさせてもらえます。こうして藤馬先生を通じて多くの方々が集えるのは、何かの縁というのか、見えざる手によって感じているのか、不思議なものを感ずるのです。

藤馬会 会長 永田 和行

藤馬先生のお人柄が私達の会の求心力です。いつもでも先生が若々しく御健康であられますように、そして広域な分野で活躍される「龍のおとし子」達がますます密な網の目を広げるように藤馬会が発展していくことを願ってやみません。

(67年度生)

周りからは羨望の声

遠方で暮る

久田 悦弘

「西門」「M1教室」「M前広場」……。あの頃と変わることなく学生が行き交う「今出川校舎」。社会人となって五年。卒業以来一年に一度は訪れる「同志社」。特に広くもなく、特に綺麗でもない(?)この校舎は、大架装かもしれないが私の「青春の思い出の地」です。

今から思えば勉強もせず、藤馬ゼミでは皆で作ったレジュメを棒読みするのが精一杯で、いつも勉強熱心な友達を見て感心するばかりであった私も現在、その不勉強のツケから職業柄(警察)か「六法」や「判例」を開いては頭を悩ます毎日です。

それに、何を間違ったのか、入ったサークルが「同志社プロレス同盟」。春秋の同志社での興行、各地への出張興行などプロレス三昧

の四年間で、すっかり投げられ強くなった私は職業柄、柔道でも痛い目に会っては、その思い出にふける毎日です。私のように、京都から遠く離れて生活する者は、近くに住むOBの皆さんより余計に、同志社に対する思い入れが強くなるのかもしれない。

ところで、私の職場の同志社OBで特に気がつくことは、皆母校に誇りを持ち、バイタリティーのある、正に「良心の全身に充満した丈夫」そのものだということです。

(88年度生)

「遇無空過者」(遇うて空
しう過ぐるもの無し)。人生
における他者との出会いを
大切に、という私の信
念にぴったりのこの言葉を
発見したのは、学生時代に
読んだ九鬼周造の「偶然性
の問題」(岩波書店・昭和十
年刊)のなかであった。そう
いえば、私にも多くの人が
ととの出会いがあり、私な
りにそれらの人びとと空し
うすれ違ってきたわけでは
なかった。出会いを大切に
し、それらの人びとから多
くのことを学び、影響をう
けてきた。

藤馬会の皆さんとゼミナ
ールを通じての邂逅もその
意味で貴重なものであり、
この「縁(えにし)」を大切
にしたいものである。第七
回総会を迎えることができ
たのも、私にとって望外の
よろこびである。歴代の会
長さんはじめ役員の方々、
そして会員の皆さんに感謝
の気持ちで一杯である。

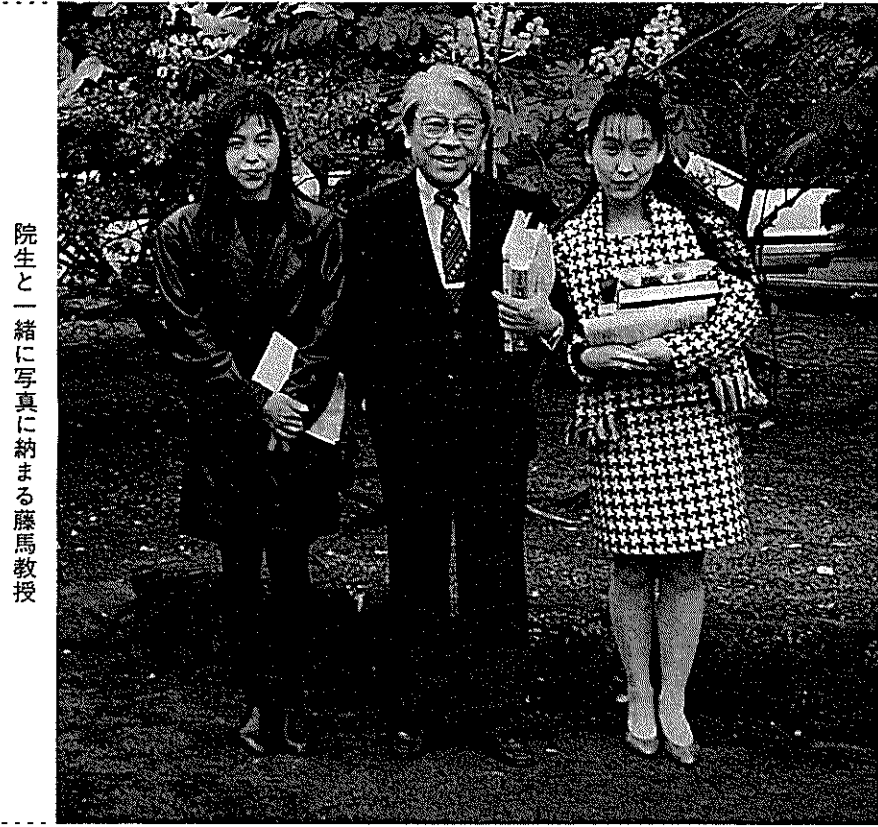
かつて、年若いスタン
ダールが若かりし頃、愛し
た多くの恋人を思い出して、
その名前をアルファベット
順に並べて回想に耽ったと
いう話をどこかで読んだこ
とがある。もちろん彼のよ
うに「生きた、書いた、愛し
た」といふ、とてもいい俗
人であるが、それでも私
なりに「生きていく」とい
うことは、私に忘れ得ぬ人
びとも多く、恩師や友にも恵
まれたことだけは自慢でき
そうである。そこでそのな
かのさて、一人の忘れ得ぬ
人について書いてみよう。

ot Congress)をモデルに
一九四八年に新設された国
會議員の立法活動を補助す
る機関として、衆・参兩院
の法制局とともに、主とし
て議員立法の準備のための
調査・研究機関である。私
がそこに勤務するようにな
ったのも、やはり何人かの
方々の力添えのおかげであ
った。法学部と大学院を通
じて「心友」であった龍井作
弥君(惜しくも平成四年三
月に世を去った。二人のご
子息は藤馬会のメンバーで
ある)の父君が当時全国区
選出の参議院議員で、この
方の推薦があったこと。そ
してもう一人は、大学院で
の指導教授になって頂いて
いた田畑忍先生(本学名誉
教授)がこの出来のわりの
学生の求めに心よく応じて
下さり、懇切極まりない推
薦状を当時、館の専門調査
員(各省事務次官待遇で一
流の学者・研究者から任用
であった藤田嗣雄先生に宛
てて書いて頂いたことによ
るものであった。

忘れ得ぬ人びと —モンブラン先生のことなど—

同志社大法学部教授

の愛弟子として育てられ、
毎日音楽コンクールのピア
ノ部門一位にもなった才女
でしかもドイツ語のよく出
来る行政法専攻の藤田晴子
さんや、のちに立教大学の
政治学教授となった神島二
郎氏、さらにのちに東大の
経済法を担当された金沢良
雄先生など、多彩な人材が
自由な息吹の中で仕事をし
ていた。私たちの事務室は、
役所とはいえ、大学の研究



院生と一緒に写真に納まる藤馬教授

藤馬 龍太郎

時ようやく女流作家の仲間
入りをはじめた瀬戸内晴
美)の夫君(のちに離婚)S
氏も事務部門に勤務してお
り、庁内で黄八丈なんかを
小粋に着こなした女流作家
の姿を二、三度見かけたこ
とを、いまもはっきり覚えて
いる。戦後新設の官庁で、
しかも研究機関でもあるの
で学閥などはなく、ユニー
クな人たちがこの役所に集
まった。東大法学部の女子
学生一期生で田中二郎教授

恵まれた恩師や友 多くを学び 影響を受ける

人論争がどうのこうの、さ
らに卑劣呼の大和朝廷の統
一をめぐる日本書紀の記述
についてなど、ひとくさり
ご自分の研究成果?をご披
露になり、われわれ若僧を
相手に煙にまいて、拳句の
果て「君達、いまなにを読ん
でいますか」と皮肉たっぶり
(すくなくとも不勉強な私
にはそう感じた)な質問を
浴びせてくる。もちろん外
国の文献についてである。
「でも、先生のご論文は文章
も難解、その内容に至っては
極めて難読というのが一般
の評価ですよ」と、口先きま
で出なかった言葉をぐつと
呑み込んで「ハア」と生返事
をして躊躇(ためら)っていた
と、うまさうに冷えてし
まったコーヒーを一気に飲
み干して、やおらご機嫌よ
ろしくご帰還とあいなる。
本を読むことが唯一楽し
みである。う老先生と違っ
て、若いわれわれにとつて、
とりわけ仕事の必要以上に
勉強しなかつた私どもにと
つて、先生の「定期便」は
たしかに「ウェルカム」で
はなかつた。しかし、それ
でいて私たちは決してモン
ブラン先生を敬遠したりす
ることはなかつた。それど
ころか一種の敬慕の念すら
抱いていたように思う。
「さて、今日は誰れがやら
れるかな」とお互いに冷や
かし合いながら、結局は、
いつの間にか先生を囲んだ
学談の中に引きずり込まれ
てしまうのであった。そん
なときでも先生は、自分の
意見を若いものに押しつけ
るようなことはなかつた。
しかし外柔内剛、温顔では
あつたが、ときたま厳しい
ご助言・忠告を聞くことが

この話はもう三十年も以
前のことである。当時の少
壮有為の調査員たちも、い
まではそれぞれ精魂を打ち
込んだ仕事を成し終えた年
令に達している。昨秋の文
化の日(勲三等旭日章の叙
勲を受けたHさん、副館長
で退職し、いまは全国図書
館協会の会長をしているT
さん、埼玉大学政治学教授
のMさんなどは私の先輩。
前副館長で、いま館の顧問
のSさん、現在国会図書館
の副館長であるFさんらは
同僚である。いずれもモン
ブラン先生の被害者!?であ
り、そして確実に先生の学
問的影響を受けた門下生で
もある。

その先生の前で決して話
題にしてはならない禁句が
一つあつた。そのことに話
題が及ぶと先生はとたんに
撫然とダンマリをきめこま
れ、ご機嫌を直して頂くの
に困惑したものであつた。
そのこととは、あの世界的
な洋画家、パリのモンパ
ルナス界隈でピカソやモジ
リヤなどエコール・ド・パリ
の画家たちと親交を結んだ
令弟のレオナルド・フジタ
(藤田嗣治画伯)が噂となる
ときであつた。

先生と画伯とは写真でみ
る限り瓜二つ。一刻、私た
ちですら二人は双生児だと思
い込んでいたくらいであ
つた。法律と絵画、全く違
った途を歩んだ二人の坊ち
やん(父君は、森鷗外とも親
しく、そして鷗外と同じく、
のちに軍医総監)の生きざ
まに、われわれには測り知
れないような兄弟愛を歪な

深い影響を受けた恩師である。国立国会図書館調査及び立法考査局というおそろしく長い名称の役所は、アメリカ議会図書館(Library of Congress)に所属する。た。仕事の性質上、欧米の文献や官報・法令集などでぎっしりと取り囲まれていたからである。

た。仕事の性質上、欧米の文献や官報・法令集などでぎっしりと取り囲まれていたからである。

はどうしてあんな風に論文を書けないのですかね」といふ具合に話が始まって、やがて専門のシュミットとケルゼンの憲法の番

の襟を正さずにはおかないものがあつた。先生がお休みで、例の定期便のない日などは、奇妙に先生の温情のこもった痛烈なブラ

のかも知れない。モンブラン先生はまことに人間的魅力に富んだ人物であつた。私にとって忘れがたい人である。

信州の3日間で収穫

心を開き合つたゼミ旅行

3回生

坂本 浩二

二ヵ月以上前から準備を進めてきた三回生のゼミ旅行。三回生になって、三分の一ほどのメンバーが変わつたとはいえ、法学演習の時から様々な行事をこなしてきました。コンパ、み

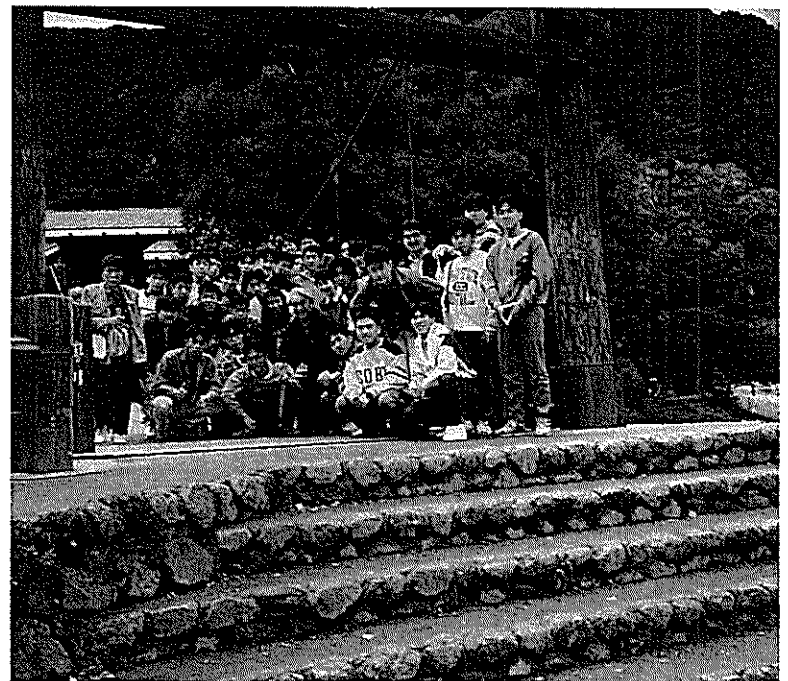
なでお弁当を持ち寄つた奈良へのピクニック。そんな中でも最も中心となるこのゼミ旅行。出発前までは「こんなことで行けるのだろうか」といった不安がつきま

通り、一日目の夜から乗鞍高原は大雨。その夜、急きよ二日目の予定を変更し、雨の上高地へ。しかし、みんなの願いが達したため

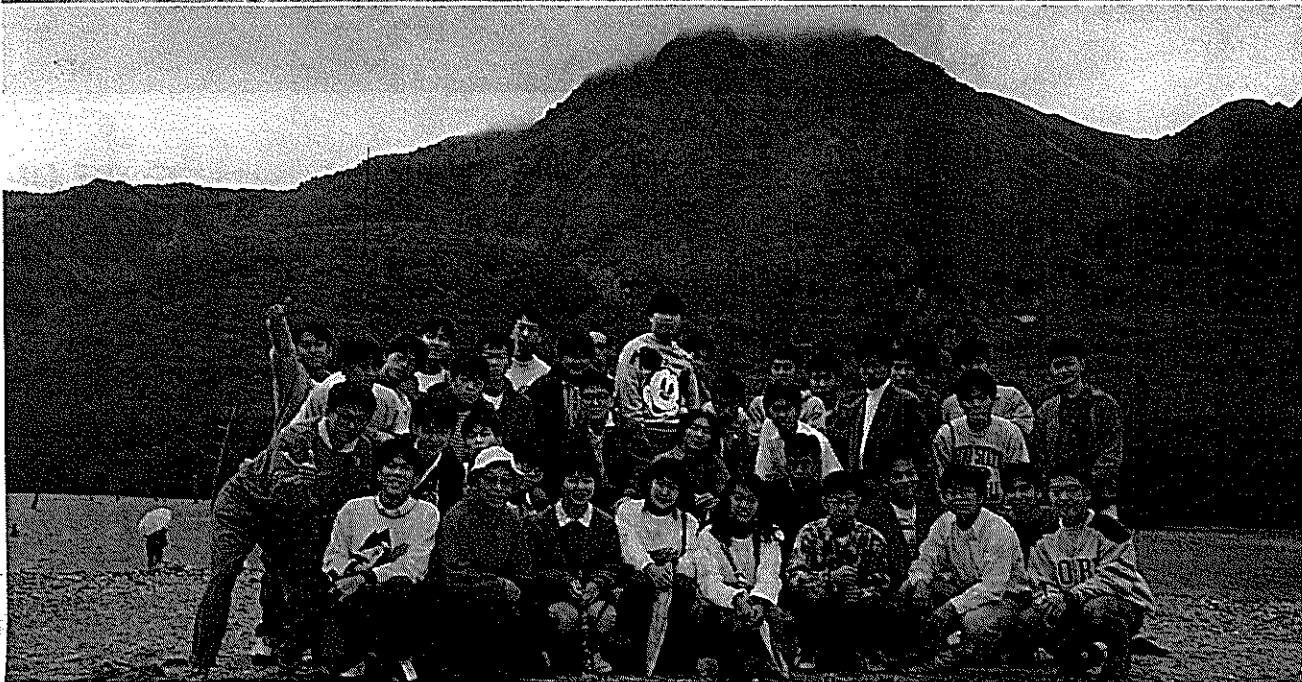
復。霧のかかった穂高連峰や焼岳を眺め、自然のすばらしさに、みんなが「やっぱり来てよかった」と思える感動を覚えました。途中、野生のサルが木の枝を伝

この旅行を機に、全員が打ち解けた素晴らしいゼミで大学生活の思い出をたくさん作りたいと思います。

(90年度生)



雨の上高地は風情たっぷり。河童橋から大正池へ自然満喫の散策



仲間意識

さまざまな思い出を刻んだゼミ旅行。松本城や穂高連峰をバックに「ハイ、ポーズ」

7年半で4回の転勤

西村 健一

昨年九月のある日、「同志社大学藤馬会の者ですが」との電話を頂いた。卒業以来七年半で四度の転勤、七回の転居。近畿に戻るの

ご依頼を受けさせて頂いた。さて、四年前から私は日興證券より東京の神楽坂近くにある(株)インテリジェントテクノロジというソフトハウスに出向している。この会社は、いわゆる人工知能

っているのかも判らない状態だった。そんな私も、今では証券界の用語よりもコンピュータ業界の用語に親しみを感ずるようになってしまっている。就職活動をして

(81年度生)



グループ単位での発表や討論で熱気のこもったゼミの授業。終われば和気あいあい



「報道」の重要性 テレビ局暮らし7年 サハラで再認識

昨年、ドキュメンタリー番組の取材でサハラ砂漠へ行く機会を得た。360度見渡す限りの空と砂に挟まれて、二週間のテント暮らしとなったわけだが、その

砂漠の真ん中でこんなことを考えた。
大学卒業後、テレビ局で仕事をし、日々の糧を得るようになって早いもので丸七年。毎日毎日、視聴者の「知る権利」に応え、他局よりも一分一秒でも早くニュースを伝えることが、世の中にとって必要不可欠からざるものだと思っていた。しかし、サハラ砂漠にはテレビも新聞もない。あるのは昼間の灼熱の太陽と夜の厳しい冷え込み、過酷な自然環境だけである。こんなにも厳しい世界の中で、サハラの住人たちは日々を過ごし、一生を送って

いく。アメリカの大統領が代わろうが、日本の政界が混乱しようが、ニュースは伝わってこないのだ。サハラの人々と話をし、食事をするとともに自分の仕事は、報道するということが人間が生活していく上でどのくらい重要なものではないのかという思いを強くしていった。これまで自分がしてきたことを否定されたようでショックだった。

ところが、これは大きな勘違いだった。サハラの住人たちは日本の総理大臣こそ知らなかったものの、フランスをはじめとする国際情勢に明かかったのだ。

テレビも新聞もないのにどうしてなのか？ 彼らによると「オアシスにつながる道に行けば、旅人から聞ける」という。灼熱の太陽の下、水だけを手に何十キロも離れたオアシスにつながる道で、いつ通るかかわからない旅人から「ニュース」を聞く。そしてそれを部落の人たちに伝える。

「どうしてそんなにまでして」。私の問いに「村人が聞きたがるから」と彼は答えた。ここにも記者がいた。私もこんな記者になりたい。

(82年度生)

バブル崩壊の荒波突破

各界へ春にはばたく

4回生

平成元年四月のディヴィス記念館での入学式が昨日のことのように思い出されますが、楽しかった大学生活も残り僅かとなりました。

今年、バブル崩壊の影響を受け、昨年末までの超売手市場から一転して就職環境は厳しいものとなりました。特に女子は有効求人倍率が一倍を切るなど危機感の強

まる中、例年より早い就職活動のスタートを切りました。今年は企業側が学生をじっくり選ぶという姿勢をとったため、昨年より解禁日が一カ月早まったにもかか

わらず、内定の時期は昨年とほぼ同じ。男子が六月下旬以降、女子が七月上旬以降だったようです。就職先の内訳を見ると、メーカーが十二人で最も多く、金融が七人、石油・資源、公務員が各三人、電力・ガス、建設が各二人、情報処理、情報サービス、鉄道、流通、外食、大学職員、宗教

馬先生は全行程を完歩され、健脚ぶりを示されました。以上簡単ではありますが、今年度四回生の活動報告とさせていただきます。(89年度生)

(86年度生)

誇れる組織

髙嶋 雅仁

さらに充実

事務局

前回の第六回藤馬総会で役員の方も大幅に入れ代わり、私も新たに事務局の仕事を担当することに決まりました。そして今回の第七回総会を迎えることになりましたが、私自身、年に一度、藤馬ゼミで学んだ同級生だけではなく、各年次の方々が来られるということで、色々なお話を伺うことができ、大変楽しみにしています。しかし、いざ事

事務局を担当することになり、実情を拝見しますと、毎年定期的にこのような会が開催されるのは他の大学、ゼミにも余り例がないと聞いており、また、例年盛会であるうえ、会報や名簿の発行をするなど歴代の役員、事務局、現役生の並々ならぬ御努力と御苦労が窺われます。

私にこのような会の仕事が無事務まるか心配ですが、会長をはじめ他の会員の皆様の御指導により一生懸命がんばっていきたくと思っていますので、御協力をよろしくお願い致します。

(86年度生)

奈良のハイキングは全長13キロ。藤馬先生も全行程を完歩され、健脚ぶりをアピール(昨年11月15日)